

大和鉄道唱歌

作詞 十五堂

一 仙人の手は仮らずとも 縮地の術は鉄の道に開くる大御代の 御影はしげき信貴の山
●仙人の手を借りなくても、鉄道が開通したことで、天皇のご治世の御影が多くしのばれる信貴山にあつたという間に行くことができる

二 山の麓の帯は 昔より名に 龍田にて 二千年前鎮座せる 宮は立野におはします
●信貴山の麓の帯は、昔から龍田という名で知られ、立野には二千年前に神慮によって鎮座せられた龍田大社がある

三 三室の山や神奈備の 森にも杖を曳きつべく 平野の神の元宮の久度の社もここにあり
●三室山や神奈備の森にも杖をしよう、京都の平野神社の元宮である久度神社もここにあり

四 秋を彩るもみじ葉の 名所も今は狭まれど 韓紅に水くくる 元の流れば大和川
●秋を彩るもみじの名所も今は狭くなったけれど、龍田川は鮮やかな紅色に水をそめている。その元の流れば大和川である

五 その川隅の王寺駅 三又なせる院線の 外に一線また起こり 巽の方に走り行く
●大和川の川隅の王寺駅は、国々の鉄道が三又の線になっていて、その外にもまた新線(大和鉄道)が開通し、巽(東南)の方に向かっていく

六 汽車の窓より眺むれば 時鳥鳴く片岡の 朝の原のほとりには 孝霊帝の御陵あり
●汽車の窓から眺めると、ほととぎすが鳴く片岡は歌枕として名のあるところ。孝霊天皇の御陵を拝むことができる

七 由緒も古き放光寺 その跡をのみ残せども 太子の建てし達磨寺は今も伽藍の規模を見る
●由緒深い放光寺には大伽藍の跡が残っている。聖徳太子が建てられた達磨寺は、今も昔の伽藍の規模を偲ぶことができる

八 花と月とに千金の 値は春の一夜竹 千世の齢も延ばすべし 桃の林は大輪田駅
●花と月とに千金の値がある春、一夜にして根付いたよな見事な竹林や寿命も延びようなりつばな桃の林が、大輪田駅にはある

九 眼界頼に打ち開け 霞む鷲峯山春日山 龍田につづく法隆寺 古き五重の塔高し
●遠く東に霞む鷲峯山春日山や近くには龍田に続く法隆寺。その古き五重塔の高さは見事な眺めだ

十 またしばらくは山間を 行けば池辺の駅近く 大演習を先帝の 見そなはした大塚山
●またしばらく山間を走ると池辺駅に着く。近くには、陸軍特別大演習の際に、明治天皇の御野立所となつた大塚山古墳がある

十一 平野の水のごとく 集まり来る河合村 五穀の神の祭らるる 広瀬の宮はここに坐す
●大和平野からの流れのごとく集まるのが河合村だ。ここに古代から五穀の神を祀っている広瀬神社が鎮座する

十二 大野のとなへ古を しのびて過ぐる箸尾駅 下街道の要所にて 人家は軒を並べたり
●古より大野と呼ばれた地をしのびながら過ぎく箸尾駅。旧道下街道の要所ゆえ、多くの人家が軒を並べている

十三 蓮如上人開きたる 御坊は麓天を突き 創立古き大福寺 数多土塔を掘り出す
●蓮如上人が開創された箸尾教行寺(箸尾御坊)の本堂の蓋は天にまっすく伸び、聖徳太子の建立といわれる大福寺からは土塔がたくさん掘り出された

十四 小北稲荷は半道余 南の方にましまして 世の信仰もあさからず 人山築く祭の日
●広陵町の小北稲荷神社は約半里南、霊験あらたかたで、祭りの日には大勢の人が訪れる

十五 馬見の山邊に連なりて 粟山新木山始めとし 古墳の多き其の中に 高市皇子は三立岡
●馬見丘陵は粟山古墳や新木山古墳を始めとして古墳が多い。その中の三立岡には高市皇子が眠っておられると『延喜式』では伝えられている

十六 筵吹の産地なる 佐味田の塚は類なき 鏡出してその数も 外には見ざる三十六
●むしろで編んだかますの産地である佐味田。佐味田宝塚古墳から鏡が36枚も出てきた。ほかには類を見ない数だ

十七 道東して打ち渡る 川は葛城曾我飛鳥 その流域に産するは 言ふまでもなき米と麦
●鉄道は東へ進み、葛城川、曾我川、飛鳥川を渡る。その流域では言つまでもなく、米や麦がとられていく

十八 野菜は西瓜まくわ瓜 芋は唐院のみならず 百済煙草は減りたれど 梨は八田も今多し
●西瓜やまくわ瓜、芋は唐院の名物。百済煙草の生産は減つたけれども、八田には梨畑が今も多い

十九 大宮ありしあたりなる 百済の手は三重の 塔と大師のうがらたる 呼字の池を残したり
●曾我川と葛城川に囲まれたこの付近一帯は、昔、大宮が住み着き、「百済野」と呼ばれた。舒明天皇建立の百済大寺とった跡とも言われる百済寺、三重塔と、弘法大師が掘らせた呼字池が今も残っている

二十 海ならねども島根山 尊き墳に鍬を入れ 御召緒太を献じたる 梅戸の旧家猶存す
●海はないが島根山(島の山)という古墳で耕作し、宮中に御召緒太草履(おめしおぶとぞうり)を献上した姫廻家が、今も梅戸に残っている

二十一 観世の祖なる清次の 所領となりし結崎や 南の方は金春の 世々住まひたる竹田郷
●観世流の祖である観世清次の所領となつた結崎。南の方には金春流ゆかりの竹田郷がある

二十二 村を都と今も呼び 庵戸の宮の宮柱 太しく立てし黒田には 子安地蔵の法楽寺
●今も都と呼ぶ庵戸の宮跡のある黒田村には、子安地蔵で有名な法楽寺がある

二十三 又東南を指さして 至る所は田原本 新王寺より六哩三分の道を一走り
●東南に向かえば、そこは田原本。新王寺駅から約10キロの鉄道を汽車は一走り

二十四 町は大和の大坂と 称え来りし商業地 戸数六百人口は 凡そ四千を数ふべし
●田原本の町は、大和の大坂と呼ばれる商業地で戸数は六百、人口はおよそ四千

二十五 幕府の世には賤ヶ嶽 七本槍の平野氏の 子孫が長く領したる 一萬石の旧藩地
●賤ヶ嶽の合戦で功を挙げた平野権兵衛。その子孫が江戸時代に、一萬石の領地を持っていた

二十六 藩主と縁浅からぬ津島神社に浄照寺 古き由来の楽田寺 皆この町の中にあり
●藩主と縁の深い津島神社や浄照寺、古い由来のある楽田寺など、皆この町の中にある

二十七 埴輪の馬を近き頃 掘り出たるも珍しく 白き蜆を産み出す 弁天もまたこの処
●珍しい埴輪の馬が掘り出された田原本のこのあたりからは、白い蜆がたくさん採れて眼病に効く奇薬といわれた。小室弁天様が祀られているところでもある

二十八 鏡作の大宮は 崇神の御世に畏くも 三種神器の御鏡を 摸し鑄たまふ靈地にて
●鏡作神社は八咫鏡やたのかがみを模鑄された場所と伝えられ、今も天照御魂神(あまてらすのみたまのかみ)が鎮まつておられる

二十九 新木の邊は天祖より 授けたまひし御鏡と 御剣齋き祀りたる 笠縫色を言伝ふ
●新木の辺りには、崇神天皇より授けられた御鏡と御剣を、祀っていた大和笠縫色と伝えられている

三十 昔栄えて神領も 多の社に詣づれば 国史の著者の安萬侶が 高き勲も想ふべし
●多神社に参拝すると、この地の出身である「古事記」の編纂者である大友万侶の功績を想う

三十一 秦河勝が建てしてふ 秦庄なる秦楽寺 こ々も蛙の噪ぎをば 大師が止めし阿字の池
●秦河勝が建てたという秦庄の秦楽寺には、勉学の妨げになると弘法大師が蛙の鳴く声を止められたという阿字の池がある

三十二 芝居に名ある忠兵衛が新口村も村つゞき 奈良の旅籠は遠けれど 三輪の茶屋へは五十町
●「異土之飛脚」で有名な忠兵衛が生まれ新口村には村つゞき。遊女梅川と逃避行、奈良の旅籠は遠いけれど三輪の茶屋なら五十町

三十三 方角かへて法貴寺の 鐘の響きも聞きぬべく 唐古に残る韓人の 池水尽きぬ語り種
●方角を変えて、法貴寺の鐘の響きも聞こえてくる唐古では、大陸人との交流を思えば池水も尽きないほどの話がある

三十四 七代つゞきし平城の 都を左右に分ちたる 朱雀大路を南に突き通したる 中街道
●七代天皇が続いた平城京の都を左右に分ける朱雀大路。その南に通っているのが中街道だ

三十五 青垣山の立並ぶ 国の真中にたゞずみて 四方の景色を見渡せば 実に一幅のパノラマ図
●青々とした山に囲まれた大和平野(国中)の真中に立つて四方の景色を見渡したらまさに一幅のパノラマ図だ

三十六 東は茂る三輪の山 西に聳ゆる金剛山 降る白雪の先見ゆる 吉野は雲の中にして
●東には生い茂つた三輪山、西にそびえる金剛山、雪が舞う先にある吉野山は雲の中だ

三十七 南は近く畷傍山 天香山耳成の 三つ山鍋の足のごと 神代ながらの姿せり
●南に畷傍山がすぐあり、天の香山、耳成山の三つは、三角形に配置された、鼎の姿同様で神代の時代が想われる

三十八 二千五百の星霜を 経たる歴史の跡は皆 其処よ此処よとまのあたり 感慨幾多胸に湧く
●二千五百年以上の長い歴史を経た旧跡では、あんなことこんなことがあつただなあと目の当たりにすることができ、感慨深いものがある

三十九 一里離れて東には 緑の烟る柳本 朝日の匂ふ桜井は やがて此線延びんとす
●一里離れた東には、緑深い柳本の里や朝日が美しい桜井の街があり、やがてそこにも線路が延びていくだろう

四十 春の日脚の落つるまで 名所を探る旅人も 暮れ行く秋の日短に 仕入れを急ぐ商人も
●春の日が落ちるまで観光名所を回る旅人や、暮れ行く秋の日が短くて仕入れを急ぐ人など、皆汽車に乗つていく

四十一 木綿は箸尾田原本 川西村の貝細工 すべて農産工業の 品を運びて送るにも
●箸尾や田原本の木綿、川西村の貝細工など、栄える産業の品を汽車で運んで送り出す

四十二 国の名を負う鉄道の 力に誰か頼らざらむ 発展すべき鉄道の 前途を誰が祝がらむ
●大和という国の名を負う鉄道(大和鉄道)の活躍に皆が期待するとともに、その前途を祝福している